

1	砂の紋澄めり白露の禪の寺
2	枝重れ地に触れて先よりひらく萩
3	地元高勝利の祈り残暑かな
4	誕生日道路に骸 ^{むくろ} 秋暑し
5	露天湯に溶かす残暑の気念 ^{きねん} さを
6	
7	髪切りてなほ余りある残暑かな
8	マイホーム ^{ひま} 牛 ^{うし} 牝 ^め く丘の流れ星
9	大かまきり腹をひしやげし昼日中
10	螳螂の拳 ^{こぶし} 虚空へ振りかぶり

清記用紙(番号乙)

(梅句) 写

1	鎌倉へ首 ^{こころ} を垂 ^た れし蓮の花
2	目薬の目玉をそれて秋暑し
3	勝ち虫のつかずはなれず夜の秋
4	諸行無常いずれ我が身と秋思かな
5	遠景の塔より高し秋桜
6	あと六日明治三十五年の秋
7	
8	
9	
10	

清記用紙(番号)

(一) 一

(写)

あまのりふま

秋微雨畝間の草は奔枝に

先祖みなびしま濡れにして墓先ふ

とまらせて吸はれるままに蚊の博士

鈴の鳴る鎌倉宮や残暑光

駒前の昼過ぎとなる秋の風

秋蟬や生家無人にして帰る

じぶらにじ

新聞紙字面も参む秋湿り

清記用紙(番号4)

(米田よし) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			えゝこ草たれか寝めたる風日和	窓外の名月愛でし国際線	同窓の残暑見舞いの和紙葉書	高速のパニック夜霧の脱着	秋雨の森林灰色の夜明け	急雨去り残暑を払ふ夜風かな	おのが葉へ光返せり秋茄子

清記用紙(番号5)

(関 洋子) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
秋暑しアルプス席のユニフォーム		短冊の黒文字にじむ花信風	犬もまだ散歩望まぬ残暑かな		草丈の低きあたりも秋の風	半袖に軽い後悔秋の朝		遺されし季寄せに付箋秋灯し	秋湿りパの字欠けたるネオン管

清記用紙(番号)

(山本打法) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		風に乗りなびく黄金 かね の稻穂かな	陽水の調べせうなき残暑かな	南柯誌に幾付箋残暑の姫 きみ の部屋	露草や父に敵 かた はぬことばかり	携帶も傘も何処へホ句の秋	秋祭り鎮守の森の福引券	風といふ残暑見舞ひを纏 まと てひけり	秋の声盃の中夫の声

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
宮跡に鳥の騒々しき残暑	そうぞう	秋暑しもてあましたる年の功	とこう	幸せにならないはずのない月夜	金風や大方丈を抜けて空		秋の風生々流転馬鹿一代	売り切れの張り紙ひとつ秋の暮れ	大糸線暮れ行く空は蕎麦の花

清記用紙（番号 8）

（近藤和卓）写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ヨレヨレの下ニカツ捨てる残暑かな	方丈の底に憩ふ秋暑し		風見鶏に月は絡みて明日は晴		紫煙めく闇ストロボの稲光		まりゆきし人の蹊音 あしおと 秋彼岸	棉吹くや吾子の白歯の生え初むる	雑用が減っては増える残暑かな

1	夕暮を背負ふ通天閣の秋
2	齒を磨き幽体離脱虫の声
3	駅までは徒歩か迷ひし残暑かな
4	子を引く手とぎに緩みて残暑なほ
5	端座して夏を見送る奥座敷
6	虫鳴いてバの闇と共鳴す
7	土壁 どがべ の家に住みゐる障子貼る
8	
9	
10	

1	さめやかな朝一番の鳥の聲
2	しなやかな指先まで日風の盆
3	ふい ふ
4	畦 ^{ふい} 刈りの金 ^ふ 一枚や落し水
5	緋毛氈 ^{ひもふし} 京のお寺の残暑かな
6	
7	台風やありがたき水 ^{みづ} 師 ^し き水
8	リュウワの山盛りチャーム秋暑し
9	
10	達筆 ^{たつひつ} の糸 ^{いと} 瓜 ^{うり} の三句 ^{さんく} 死 ^し 期 ^き 間 ^{かん} 近 ^き

清記用紙(番号 11)

(福田洗弥) 写

1	雪折 ゆきか の岳 だけ 樺 はな して霧速 きり し
2	星流 ほし る好女 きょうにょ 多 た 得 とく と誰 だれ か言 い ふ
3	秋涼 あき し照 あ らし出 で されし大手門
4	秋涼 あき し照 あ らし出 で されし
5	担任 たんにん は産休 さんきゅう に入る休暇 きゅうか 明け
6	鹿寄 しか せのホルンの音 おと の秋 あき めまぬ
7	
8	残暑 ざんしよ なお踏 ふみ 鞆 たもと を踏 ふみ んで鉄句 てつく う
9	沈黙 しんもく の残業 ざんごう にある、残暑 ざんしよ かな
10	

清記用紙(番号 12)

(ひろし)

(写)

1	遙けしや畦に延々曼珠沙華
2	秋の畦赤きリードや今も手に
3	
4	句座果てて笑顔に秋は澄めりけり
5	残暑かな猫の毛ふうわり宙を行く
6	
7	秋灯や音符躍りし古スコア
8	音もなく残暑のかけら空に消ゆ
9	
10	見送りの母の速さで盆とんぼ

清記用紙(番号13)

(守彦) 写

1	川はさみ向かふは定地豊の秋
2	秋立つや貸自転車で行く飛鳥
3	足裏に気配感じいる残暑かな
4	押入れがパンツと閉まりし秋の闇
5	稻刈りや瘡蓋 かぶた の下毛 かみ が生える
6	桃冷やし丁寧に剥き丸かじり
7	あの人の名前出てこぬ夜長かな
8	
9	
10	

お相手は樹木希林です菊脛

振り下ろし跳ね上がりたる運動会

朝顔や人妻なりし友笑ふ

あかはだやま

啓ちゃんの赤膚山が赤茶ける

行灯に人の揺らぎや地藏盆

病牀の玻璃窓染むる秋夕焼

ひそ

寂しさや部屋に潜む虫の音

清記用紙(番号 15)

(反澤一途) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			バス停のベンチに残る暑さがな	いつもより飛機高くいて秋燈めり	新涼や墨痕著き書道展	バス停に自前のベンチ秋暑し	運搬員腰に鈴つり秋の駅	秋出水生きゆくための水ならず	「おかえり」とひと刷毛描く秋の虹

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
稻光手品師の手は動かさる		爽秋の飛鳥美人の笑み増して	一振りの塩とて粥のよき残暑		窓に向け夜更けの突進和の蟬	棕鳥と般若心経唱える子		残暑とふ葉書の主の逝きてをり	茶殻掬き蘭草筆や夏座敷

1	ケセラセラ為す ^種 休もなき残暑かな
2	虫の音や老いたる耳に遠かりき
3	坂の上枝に青柿三つかな
4	
5	稜線の翳 ^{かげ} りて月の赤らめく
6	
7	烟にて挽いで貰ひしとうもろこし
8	
9	秋暑し臨月肩で息をくして
10	無軌道に街をさまよう残る蟬

清記用紙(番号 19)

(長岡) 写

待ち人來たらず虫の声うるさ

残暑なお斑鳩の寺畦道も

白桃の産毛確々め一つ買う

子等帰りまた老二人今朝の秋

新涼の家にこもりて耳そうじ

落蟬を間に犬とすれ違ひ

暗闇の叢中に虫時雨